

音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発

地域教育支援部 研究主事兼指導主事 浅井 ちとせ

要約

平成29年3月に中学校学習指導要領が告示され、学校で音楽を学ぶ意義を「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」と目標に示された。

今年度コロナ禍により多くの学校が休校となった。今後も生徒が在宅での学習となる事態を想定し、身の回りの生活から音や音素材の面白さを発見し、自分が住む地域の自然や文化を基に音楽を創作して発信することを音楽科の学習課題として設定し、学校が再開された際の音楽科授業につなげ、上記の音楽科の目標が示す資質・能力を具現化する課題例として提案する。

また、本年度の京都府総合教育センター（以下「センター」という。）で実施した音楽科実技講座を受講した音楽科教諭が、講座後、勤務するA中学校で、本講座内容を基に7時間の題材指導計画を立てて授業を実施し、12月の研究発表会で公開授業を行った。本公開授業は、「綾部百人一首」から校区の寺院や川等を詠んだ五首を生徒に提示して選ばせた後に、生徒が箏のさまざまな奏法を使って旋律等を創作し、各自が一人ずつ箏の演奏発表する内容であった。各生徒が演奏発表する前に、旋律や速度や奏法、発想等の工夫の根拠を句のイメージと関連させて発表し、全員が響く箏の音で演奏していた。これらのパフォーマンスの高さを本授業の成果と考え、成果の要因を分析しながら、音楽科の目標が示す資質・能力を具体化させた指導事例として提案したい。

キーワード：音楽科の目標が示す資質・能力の具現化

生活の中の音素材を使った音風景の創作

自然風景と音楽を形づくっている要素の関連

自分の住む地域の魅力を音楽で発信

1 はじめに

平成29年3月に中学校学習指導要領が告示され、学校の教育課程で音楽を学ぶ意義について「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と中学校音楽科の目標の柱書きに示された。

今回、音楽科の学習における「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」を実現させる指導事例を具体的に示したいと考え、本テーマを設定した。

今年度、コロナ禍により多くの学校が休校となったが、今後も生徒が在宅での学習となる事態を想定し、身の回りの生活から音や音素材の面白さを発見し、心に留った風景を身の回りの道具や素材を用いて音で表し、「音風景」として日記に綴り、学校再開後の音楽

の授業で共有し、表したいイメージと音楽の構造との関連の学習を深めながら、自分が住む地域の自然や文化の魅力を音楽で発信することを学習課題として設定する。

特に、学校が再開された後の音楽科授業において、学習課題を効果的につなげて深めるための教材選択は重要である。

今回は、イメージを効果的に音楽につなげる課題として、課題1から課題4まで示して地域の魅力を音楽で発信する例としてセンター音楽科講座や出前講座で提案していきたい。

また、本年度のセンター音楽科実技講座「中高で深める『和を奏でよう&みやびな音楽を創ろう』」（令和2年8月27日実施）で、箏の基礎技能を用いて百人一首や万葉集の和歌を素材として音楽創作する講座を実施した。受講者は創作の前に、箏曲「六段の調」の「押し手」「引き色」「合わせ爪」「割爪」「裏連」などの奏法を箏演奏家から学び、それらの奏法を用いて旋律を創作し、一人ずつ箏を奏でながら和歌を詠って発表し、箏演奏家から一人ずつ丁寧な評価を得た。

本講座を受講した音楽科教諭が、勤務するA中学校第1学年で本講座内容を基に、表現と鑑賞を関連させて7時間の題材指導計画で授業を実施し、12月に箏を使った創作分野の公開授業を行った。

公開授業は、創作の基となる素材として「綾部百人一首」から校区の寺院や川等を詠んだ五首を提示して各自に選ばせた後に、句のイメージを箏の基礎奏法を使って平調子で創作させて演奏し、相互評価する内容であった。生徒は演奏発表の前に、創作した旋律、奏法、発想、速度等について、句のイメージを音楽に関連させる根拠を言葉で説明した後に、箏の音色を響かせて演奏する姿は、本題材を貫く問いを全員が解決した姿であった。これらのパフォーマンスの高さを本研究授業の成果と考え、要因を分析した。

特に、本題材を貫く問いを解決する過程において、音楽的な見方・考え方を働かせたことが重要であり、生徒が感性を働かせて音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けることができる題材構成の工夫等を効果的な支援の例として共に示したい。

2 自宅と学校での音楽科授業をつなげて深める課題の提案

○課題1～4を貫くねらい：音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる。

課題1 「自分の生活の身の回りの音素材を使って、風景を表そう<Sound Create>」

1 題材名：「音風景で日記を綴ろう」（中学校第1学年）

2 本題材で扱う学習指導要領の内容

第1学年 A表現 (3)創作

イ 次の(ア)及び(イ)について、表したいイメージと関わらせて理解すること。

(イ) 音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴

ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の組合せなどの技能を身に付けること。

〔共通事項〕(1) 生徒の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素：「音色」、「リズム」、「強弱」

3 < 課題シート >

音楽科自宅学習課題「音風景を日記で綴ろう」

課題：自宅で過ごす生活の中で、雨の音や風の音に耳を澄ませて、身近な道具やリコーダーのマウスピース等の身近な道具や素材を使って表し「音風景」を創ろう。さらに「音風景」をタブレット端末に録音してみよう。

★音風景の例

- ・雨 ・風 ・川 ・波 ・雷 ・汽笛 ・晩鐘 ・蛙の鳴き声 ・鳥のさえずり ・ひぐらし
- ・笹 ・電車 ・踏切 ・飛行機 ・会話 ・花火（打ち上げ、線香、仕掛け）

★記入例 ○月○日（ ）天気（ ） 「音風景」の時間：○時○○分頃

「音風景」：鳥のさえずり、カーテンを開ける音、子ども達の足音

「音風景」の説明：目が覚めたら近くで鳥のさえずりが聞こえてきた。カーテンを開けると朝日が差し込み、鳥の声と一緒に、遠くで近所の子どもの足音が聞こえた。

使った音素材と奏法の工夫：鉛筆のキャップをマウスピースにして細かくタンギングし、強弱を付けて鳥のさえずりを表した。カーテンを開ける音はA4紙を1cm幅に山折りにして強く鉛筆で掻いて表した。子ども達の足音は木箱を定規で細かく叩き、走り去る様子をデクレッシェンドで表した。

課題2「イメージと奏法の関連を考えよう<鑑賞教材から>」（学校再開後の授業）

- 1 題材名：「情景を表す効果的な奏法を見つけよう」（中学校第1学年）
教材名：尺八曲「巢鶴鈴慕」（琴古流古典本曲）、雅楽「左舞『万歳楽』」
- 2 本題材で扱う学習指導要領の内容
第1学年 B鑑賞
イ 次の(ア)から(ウ)までについて理解すること。
(ア) 曲想と音楽の構想との関わりについて気付くこと。
〔共通事項〕(1) 生徒の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素：
「音色」、「速度」（速度の保持や変化、緩急の対比）
イに示す「音符、休符、記号や用語」：「間」

3 < 課題用ワークシート >

- ① 尺八曲「巢鶴鈴慕」は、尺八の音色や奏法を工夫してさまざまな場面を表しています。
雄雌の鶴の出会いと求愛、雛鳥の誕生、巣立ち等の様子をどのように表しているか、音色や奏法の特徴と場面のイメージとの関連を見つけよう。
ア 雄雌の鶴の出会いと求愛：

イ 雛鳥の誕生：
<ヒント>生まれたばかりの雛鳥をどのようにあらわしているかな？

ウ 子鶴の巣立ち：

エ 親鳥の死：

②尺八の以下の奏法について、どんな場面で使うと効果的かを考えて書こう。
ア すり上げ（ポルタメント）
イ コロコロ（トリル）

ウ タマ音 (フラッター)

エ ムラ息

③上記のアイウエの奏法についてリコーダーで演奏できるものを試してみよう。

④リコーダーで演奏できる尺八の奏法を使って音楽を創作するなら、どの奏法をどんな場面で使いたいですか？

⑤楽曲の演奏の全体を通して、「速度」の変化や「間」について気付いたことを書きましょう。

⑥雅楽「左舞『万歳楽 (まんざいらく)』」を鑑賞し、鳳凰(ほうおう)の鳴き声を何の楽器がどのような奏法で表しているか、感じたイメージを書きましょう。

課題3 「古典文学にBGMをつけよう～マウスピースを使って音風景で表そう～」

1 題材名：「マウスピースを使って『枕草子』のイメージを表現しよう」（中学校第1学年）

BGMを付ける古典文学：「枕草子」の第1段「春はあけぼの」より「秋は夕暮れ」（清少納言作）

2 本題材で扱う学習指導要領の内容

第1学年 A表現 (3)創作

ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、創作表現を創意工夫すること。

イ 次の(ア)及び(イ)について、表したいイメージと関わらせて理解すること。

(イ) 音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴

ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の組合せなどの技能を身に付けること。

〔共通事項〕(1) 生徒の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素：「音色」、「速度」（速度の保持や変化、緩急の対比）

イに示す「音符、休符、記号や用語」：「間」

3 <課題用ワークシート>

秋の風景をリコーダーのマウスピースを使って奏法を工夫して表し、BGMを創りましょう。

音風景：「枕草子」の第1段「春はあけぼの」より「秋は夕暮れ」

秋は夕暮れ。

夕日の差して山の端いと近くなりたるに、鳥の寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど

飛び急ぐさへあはれなり。

まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとおかし。

日入りはてて、風の音、虫の音などはた言うべきにあらず。

リコーダーのマウスピースを使って、タンギングやポルタメント、重音等、さまざまな奏法を試して、情景を表すBGMを創作し、演奏しよう。各場面にBGMを付ける際にどのように奏法や表現方法を工夫しましたか。場面を表すの工夫についてまとめてみよう。

課題4 「わたしの地域の魅力発信ソングを創ろう」

1 題材名「地域の魅力を民謡で発信しよう」

2 本題材で扱う学習指導要領の内容

第1学年 A表現 (3)創作

ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、創作表現を創意工夫すること。

イ 次の(ア)及び(イ)について、表したいイメージと関わらせて理解すること。

(イ) 音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴

ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の組合せなどの技能を身に付けること。

〔共通事項〕(1) 生徒の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素：

旋律（つながり方、日本音階、装飾）、構成、速度

イに示す「音符、休符、記号や用語」：「間」

3 <課題用ワークシート>

次の創作条件で地域発信ソングを創りましょう。

①歌詞：自分の住む地域の魅力を方言を使って七五調で作成する。

(例「水無月さんに(7) 来ちゃったか(5) 今年の花火(7) 良い花火(5)」)

②拍子：2/4 を拍節を基本とする。歌詞によって5拍子等の変拍子も可。

③リズム：「こきりこ節」のリズムや「福知山音頭」の「どっこいせ」のリズムを参考にして、モチーフリズムを作って、反復・変化させる。「間」をとってもよい。

④速さ：基本は同じ速度に保つが、途中、速度変化を自由に付けてもよい。

⑤旋律：方言のイントネーションを基に、日本音階の3音(ミソラ)を使い、リコーダーを使って旋律を作成する。装飾音を入れてもよい。伸ばす母音や産み字にこぶしを付けて、装飾を工夫してもよい。

<発展>

⑥前奏や伴奏：合いの手やかけ声、手拍子を入れて民謡らしく工夫する。尺八の効果性からコーダーで前奏を付けたり、旋律にベース音を重ねてもよい。

3 音楽科講座の箏を用いた創作講座内容とA中学校での実践

(1) センター音楽科講座の概要について

①日時：令和2年8月27日(木) 午後1時～5時

②会場：京都府総合教育センター北部研修所3階音楽実習室

③研修内容：

ア 講義「和楽器の表現と鑑賞の関連図った題材構成」

イ 実技I「和の響きを奏でよう」

(実技Ⅰ レジュメより)

1 和の響きを奏でよう

(1) 平調子に調弦して「さくらさくら」を弾きましょう。

(2) 「六段の調」の「初段」の冒頭を弾きましょう。

- ・引き色 ・搔き爪(搔き手) <中指> ・割り爪<人指し指、中指> ・コーロリン
- ・後押し ・押し手(強押し・弱押し) ・突き色

2 まとめ

ウ 実技Ⅱ・演習「箏の基本奏法を生かして音楽を創ろう」

(実技Ⅱ・演習 レジュメより)

1 箏の音色と奏法を生かした創作

(1) さまざまな調弦

- ・陰の調子：平調子、雲井調子 ・陽の調子：楽調子、乃木調子

(2) 「初段」の基本奏法を使って百人一首や万葉集から句を選んで旋律をつけましょう。

<百人一首> 秋の句

- ア 奥山に 紅葉ふみ分け 鳴く鹿の 声きくときぞ 秋は悲しき
- イ 月見れば 千々にもこそ 悲しけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど
- ウ 嵐吹く 三室の山の 紅葉葉は 竜田の川の 錦なりけり

<万葉集> 「梅花の歌」32首より(天平2年 九州の太宰府公邸)

- エ 梅の花 今盛りなり 百鳥の 声恋しきの 春来るらし
- オ 春の野に 霧立ち渡り 降る雪と 人の見るまで 梅の花散る

<万葉集>

- カ 新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事(よごと)
- キ 茜さす 紫野ゆき 標野ゆき 野守は見ずや 君が袖ふる

2 まとめ

(2) 上記音楽科講座を音楽科授業で実施したA中学校の指導事例について

<概要>

A中学校は、昨年度と本年度、京都府教育委員会「学びの深化プロジェクト」の指定を受け、学校全体で「自律的学習者の育成」を研究主題として、バックワードデザインによる授業改善の研究を続けてきた。令和2年12月初旬の研究発表会で研究成果が発表され、音楽科は第1学年の授業が公開された。

音楽科担当教諭は、上記研修講座を受講後、講座を基に中学生の実態に応じて、題材を貫く問いを設定し、7時間の題材指導計画を立てて授業を実施した。

題材構成は、最初に「六段の調」の鑑賞によって箏の音色を感受しながら様々な奏法を学んだ後、「さくらさくら」を教材として箏の基礎技能を身に付け、「綾部百人一首」の句のイメージを箏の音色で創作する構想であり、鑑賞領域と表現領域を効果的に関連させながら、句のイメージを効果的に表す旋律や奏法、曲想を試行錯誤し、グループやクラス内で発表して、助言し合いながら生徒の思考力を育む活動内容であった。

今回、創作の基となる素材として「綾部百人一首」から校区を詠んだ句を選んで提示された点は、生徒が句のイメージを自分の生活実感につなげやすい点で工夫が見られた。また、公開授業で一人ずつ箏の演奏を発表する前に、なぜこのような奏法を使ったかの音楽的な根拠を、説明してから演奏した点も、相互評価を行う上で効果的であった。

筆者は当日の公開授業を参観し、生徒達が同じ問いを共有し、焦点化した問いに対して意見を交流し合うことで高いパフォーマンスを発揮していることを確認した。

以下はその詳細である。

- ①学校名と学年（人数） A中学校 第1学年（24名）
- ②題材名 「箏の音色を生かして音楽を創ろう（「六段の調」「さくらさくら）」
- ③題材の目標 「六段の調」を鑑賞して「箏」の音色や響きを感じ取り、音色を生かした旋律を創作しよう。
- ④学習指導の計画

時	主な学習活動	教師の指導・支援
1	【鑑賞】「六段の調」の音色に注目して鑑賞する。	○「音色や音、楽曲の構成の特徴を捉えよう」
2	【器楽】箏の基本奏法を身に付け、自分なりの「いい音」を考える。	○「弦の名前によって音の高さが変化することを確認しよう」「自分なりの『いい音』を出すよう工夫しよう。」 ★「いい音シート」
3	【創作】 ①一首を選択し、句のイメージを「作曲メモ」に書き出す。 ②音のモチーフを創り、つなげてまとまりのある旋律を創作する。	○「一から巾の弦名で旋律を書き留めよう」 ○「旋律の最終音や奏法等の終わり方を考えよう」 ★「作曲メモ」
4	【創作・器楽】創作した旋律を箏で演奏しよう。	○「発表時の説明や紹介も含めて、次時を見通して箏の練習に取り組もう」
5	【創作・器楽】創作した旋律を箏で演奏しよう。	○「自分の創作した旋律を発表しよう」 ○「友達の演奏を聴いてアドバイスしよう」
6	【創作・器楽】創作した旋律を箏で演奏しよう。	○「自分の創作した旋律を発表しよう」
7	(第6時：公開授業)	○「友達の演奏を聴いてアドバイスしよう」

(3) A中学校の高い創作パフォーマンスを生み出した指導上の工夫

① 鑑賞と表現（器楽、創作）をつなげた題材構成の工夫

箏曲「六段の調」の鑑賞活動や箏の基礎的な奏法の器楽の活動で得た様々な知識及び技能を基に、創作素材として「綾部百人一首」のA中学校区の名所旧跡を詠んだ五首から生徒が一首を選び、句のイメージを箏を使って平調子で創作し、生徒自身の箏演奏によって器楽表現する題材構成であり、題材の目標を到達するために鑑賞活動と表現活動を効果的に組み合わせている。

② 題材を貫く問いの設定と問いの解決に向けた支援

題材全体で指導する〔共通事項〕を「音色」として、鑑賞、器楽、創作の活動全体を通して「音色」を追求し、鑑賞と表現を関連させて全7時間の題材構成を工夫している。本題材を貫く問いを解決する具体の姿について、「いい音」（良い音色）

を出すためにはどのように弾けばよいかを自分なりに意識、工夫し、頭に浮かんだ旋律や曲想などを縦型枠式譜に書き留めながら、自分が発想する「いい音」を出すために繰り返し練習に取り組む姿を育成すべき資質・能力の具体の姿とした。また、上記の「問い」を解決するための箏の基本奏法として、弦を弾いた直後、次の弦で止める奏法を基本奏法として全員に習得させていた。

以下は指導過程における「いい音」を見つける経過である。

第1時の鑑賞活動では鑑賞ワークシートで「いい音の追求と工夫」と明示し、箏の奏法や「音色」について確認できるよう、シートの項目が工夫されていた。

第2時の器楽活動では、「さくらさくら」を教材としながら「いい音シート」によって、各自が目標とする「音色」を具体的に言語化させ、題材全体を貫くテーマとして設定されていた。特に「いい音」を求める箏の練習過程で、グループで「さくらさくら」の演奏を順番に発表しながら「いい音」の発見に向けて助言し合い、グループで協力しながら「いい音」を見つける活動を行っていた。また、基本奏法に難しさを感じている生徒に対しては「いい音」へ近づくよう個別の支援がなされていた。

第6時の公開授業では、各自の創作意図の説明の際に、声が小さかった生徒も、箏の演奏では、全員がしっかりと芯のある音色で演奏していた。本題材の問いが題材全体を通して貫いていたことが生徒の姿を通して確認できた。

※「いい音」見つけの生徒のワークシートより（第2時の箏の器楽のグループ活動）

・S（男子） 高い音が響いていき、延びていく感じが「いい音」なのだと思う。そのためにはしっかりと弦を弾かないと「いい音」は出ないのでしっかりと力強く指を動かして音を出すことを意識して演奏するようにした。

<Sに対する友達からのコメント>

高い音の一つ一つの音がきれいだったので良かったと思いますが、響かせる部分では遠くにいたから少し聞こえにくい部分があったので、一つ一つの音をもっと力強く弾けば、もっと良くなると思いました。

③ 地域教材を創作素材とした効果性

指導者が創作テーマの素材として提示した「綾部百人一首」の五首は、校区の寺院や川、古墳等を詠んだ句であり、取り札には句に詠まれた寺院や川を連想した絵が添付されている。生徒にとっては身近な素材であり、句のイメージを生活実感につなげて、思いや意図をもって創作への意欲を喚起しやすい教材である。

以下は指導者が提示した「綾部百人一首」の五首である。

- 1 犀川の句 : 母に似て 流れはやさし 犀川の タベ響かう 春の水音
- 2 由良川の句 : 由良川の 流れ清らかに 鮎はねて 瀬音涼しく 釣り人の立つ
- 3 楞厳寺の句 : 楞厳寺の 蓮池すでに 花とじて 身に沁むばかりの ひぐらしの声
- 4 円山古墳の句 : 円山の 古墳に眠れる 人は誰 勾玉のひとつ 凝りし紅
- 5 丹の国原の句 : 一つ世界を 世にさきがけて 宜りあげし 丹の国原に 朝ひかり満つ

④ 句のイメージを音楽創作につなげる「作曲メモ」

指導者は音楽創作に当たり、生徒が選んだ句のイメージを言語化させる過程において、句から感じた印象を、K J法でより細かく書き出させて「作曲メモ」として

メモさせながら、ことばの断片から「音のモチーフ」として短い音のまとまりを創らせ、句の切れ目や構成を工夫して複数の「音のモチーフ」をつなげて旋律となるよう指導した。句のイメージに対する「音のモチーフ」や構成のアイデアが浮かばない生徒に対しては、友達の演奏を聴きながらヒントを得てアイデアを膨らませるように助言し、句のイメージを旋律化できるよう支援した。

また、出だしの音が決まらない生徒に対して、最初と最後の音をどの弦にするかを個別に支援した結果、最初の音が決まると続く音を試しやすくなり、創作活動が進む生徒もいた。

⑤ 縦型枠式譜による記譜と形成的評価資料としての活用

旋律創作において西洋の五線譜を用いず、箏の弦を示す漢数字等（一弦～十弦、斗（11弦）・為（12弦）・巾（13弦）を用いた縦型枠式譜で記譜しながら、創作の過程において記録に残すよう促した。また、縦型枠式譜の左側に、創作の過程で、速度や奏法、発想等の工夫を書き加えた、工夫点とその根拠を活動の過程で随時記入して、題材終了時に生徒・指導者の両者が題材全体を振り返り、評価に生かすことができるよう工夫されていた。

⑥ 創作に対する思いや意図の発表の場の設定

各自が箏の演奏前に、句のイメージを旋律につなげる工夫点（旋律の特徴、間、反復等）及び実際の奏法上の工夫点を説明する場面を設定したことによって、鑑賞者が友達の創作に対する思いや意図を理解して、箏曲を鑑賞することができ、効果的な相互評価が実現できた。

4 まとめ

今回、中学校音楽科の目標の柱書き「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」の中の「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」を実現させる指導事例を具体的に示したいと考え、前半ではパフォーマンス課題1～4を提案し、後半で、A中学校の指導事例を提示した。

中学校音楽科の目標を実現するためには、音楽的な見方・考え方を働かせることが重要であり、生徒が感性を働かせて音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けることができる題材構成やアイデアが鍵となる。

A中学校では、題材のねらいが常時、題材を貫く問いとして指導者と生徒に共有されて、ねらいの達成に向けた様々な手立てが見られた。これが生徒の目的意識につながり、高いモチベーションとパフォーマンスを確認することができた。

本題材を3年間の題材構成として次年度につなげ、「綾部百人一首」を基にした創作作品を地域に発信し、カリキュラムマネジメントの視点から古典文学作品を素材として古典の暗唱にBGMを付けたり、浮世絵作品を素材に今回の創作手法を用いて、富士山や波等の「絵画モチーフ」の断片を「音のモチーフ」に置き換えたりしながら他教科とも関連させてテーマ設定することが考えられる。

今後、センター音楽科講座や出前講座等において、「生活や社会の中の音や音楽、音

楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」に向けた効果的な指導方法を提示しながら、児童生徒の変容や音楽科授業における効果を検証したいと考えている。

<参考文献>

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社

京都府綾部市立豊里中学校（2020）「京都府綾部市立豊里中学校研究発表会 研究の軌跡」